韓国都市における洋式戸建て住宅の屋外空間の利用実態と庭及びマダンの概念に関する考察

Considerations of the Resident's Usage and Consciousness of the Outdoor Space, and the Concept of "Garden and Madang" in the Western-style Detached House of the Urban Area in Korea

全 現美* 鳴海邦碩*

Hyunmi JUN Kunihiro NARUMI

摘要：本論文は、韓国都市部の洋式戸建て住宅における屋外空間の利用実態と将来の整備に対する居住者の意向をアンケート調査によって明らかにしたものである。韓国では、住宅敷地における屋外空間を指す言葉として「マダン」があるが、一方で「庭」という言葉も用いられつつある。新しいタイプの洋式住宅ではそれらの用いられ方がどのように変わっているのかとともに、屋外空間の実態とそ

1. はじめに

韓国における伝統的な韓屋では、住宅はマダンと呼ばれる屋外空間を中心に構成され、その敷地は塀によって囲まれている。この影響を受けて市街地住宅として普及した韓式住宅もまた同じような空間構成をもち、その敷地はより高い塀によって囲まれた。このような韓式住宅の空間構成は、その後一般化することになった折衷式住宅¹⁾にも引き継がれ、これらの住宅で構成される韓国都市の住宅市街地は、塀が連続する殺風景な景観をもたらす結果となった。しかし、このような町並みのアメニティの改善が課題の一つとして認識される傾向にある。

一方、洋式スタイルの戸建て住宅も供給されており、洋式住宅においては、伝統的なマダンとは異なった日本的な概念での庭が作られる傾向にある。その結果、住宅の緑が町並み景観のなかで重要な役割を果たす傾向が見られる。

そこで本論文は、洋式戸建て住宅の居住者を対象として、その住宅の屋外空間の利用実態およびその将来の整備への意向を明らかにすると共に、屋外空間をマダンと認識する韓国の伝統的な捉え方が変化しているかについて明らかにすることを目的としたものである。

韓国の住宅の庭をテーマとした既往研究としては、今まで伝統的ないし本格的な「庭園」に関する研究²⁾³⁾⁴⁾は多く蓄積されてきているが、市街地の中における個人住宅の「庭」に着目し、さらに居住している住民の評価に基づいた研究はまだ少ない。特に伝統的なマダンに関する認識と合せて考察した研究は、まだ行われていない。

2. 調査の方法および調査対象地区の概要

(1) 調査の方法

調査の主たる方法はアンケート調査であり、庭の実態調査を補足的に行った。調査対象地区は、韓国の大邱市における比較的新しい洋式スタイルの戸建て計画住宅地を選定し、調査期間は平成9年8月11日～20日であった。なお、調査地区選定については、従来の韓屋のように公私境界を高い塀で遮蔽した状況とは対照的に、街並みに緑が表出している住宅地を選定するようにつとめた。この点については後述の調査対象地区の特性のところで詳述することにする。アンケート調査は、対象住宅地の中から100世帯を抽出し、訪問面接配布・訪問回収により61世帯から有効票を回

収した。なお、今回のアンケート調査は、マダンおよび庭の利用実態と認識について調査することを目的としたものであり、調査項目としては、「マダンや庭の有無」「マダンと庭の認識の区別の有無」「マダンや庭をどのような空間と捉えているか」「自宅の庭を他人に見せてもいいかどうか」「他人に緑を見せる工夫をしているかどうか」「庭の手入れの回数」「接客の場所」「屋外空間の利用状況」「屋外空間デザインの将来意向」についてたずねた。また10事例の住宅の庭を実態調査のサンプルとして選び、庭に対する使い方や家族の属性に関するヒアリングと簡単な図面プラン、庭のプラン、庭に植えられている植物などについての観察も行なった。ただし今回の考察は、アンケート調査の結果に重点をおいて行っている。

(2) 調査対象住宅地の概要 (図-1)

図-1 調査対象地区の所在位置図と平面図

対象とした住宅地は、大邱市の中心市街地に位置する寿城区の中洞にある。寿城区は、人口約47万人、世帯数13万3千、住宅数11万3千、住宅普及率が84.8%⁵⁾となっており、大邱市の区のなかでも大規模な区である。

調査対象地区は、盆地都市である大邱市にあって、四方が山に囲まれ自然景観が豊かな住宅地となっている。当初は畑や水田が広がる地域に自然発生的に住宅が建設されていたが、1972年4月10日～1978年5月16日の土地区画整理事業やそれに伴う都

*大阪大学工学部環境工学科

図-2 調査対象地区の実態図面と屋外空間の状況

市計画用途地域変更により街路が整然と区画された計画的な住宅地となった。その後、1974年6月12日に専用住居地区として用途地域変更が再び行われ、現在は1993年12月末の用途変更により一般住居地区として指定されている。調査対象地には大学の教授としての仕事に勤める人が多く住んでいることもあり、「教授村」とも呼ばれている。

図-2は対象調査地における住宅の庭の典型的なスタイルを事例として取り上げたものである。写真の内容から分かるように、手入れが行き届いており、見る庭、見せる庭の性格が強く感じられる。

3. 回答者の属性

アンケートの回答者の属性は、性別では男女それぞれ半分ずつを占めており、年齢では若い20代から70代の高齢者まで平均的に分布している。家族構成は、「夫婦+子供」の核家族の形態が65.5%で全体の半分以上を占めており、職業は主婦が32.2%、自営業23.7%、勤め人20.3%となっている。所得収入は中層級収入者が多く、自家持ちの住まい形態が93.2%で全体の9割以上を占めている。

アンケート結果の分析では、回答者の属性別には明確な傾向が見られなかったため、属性別の分析結果は一部を除いて示していない。その原因として、サンプル数が少ないこと、あるいは庭の利用および屋外空間の認識が属性に必ずしも相関していないことなどの理由が考えられる。それを検討することは残された課題であるが、全体分析も有用な知見を示していると判断される。

4. 住宅の屋外空間の公開許容性について

庭を他人に見せてもいいと思うか、他人に庭の緑を見せる工夫をしているか、どのような客を屋外空間のどこまで入れるか、といった質問に対する回答から、洋式スタイルの戸建て住宅における屋外空間の公開許容性について見ることにする。

(1) 屋外空間の公開許容性

屋外空間の公開許容性に関して自宅の庭を他人に見せてもいいと思っているかどうかについて、居住者の意向をたずねた(図-3)。全体の過半数を越える70%が「他人に庭を見せてもいいと思っている」と回答しており、他人に対する屋外空間の公開許容性が非常に高く認識されていることが明らかであった。

図-3 庭の公開許容性

一方、「見せたくない」の場合その理由としては、半数以上が「あまり手入れをしていないから: 61.3%」であり、「防犯・安全の問題: 23.5%」や「プライベートな所だから: 14.7%」を勘案すると、庭をきれいに手入れしていることが屋外空間の公開許容性に影響を与えることが分かった。

(2) 庭を見せるための境界の工夫

図-4 庭を見せるための境界の工夫

他人に緑を見せる工夫をしているかどうかを把握するため、道路から見える自分の家の緑のことを意識し、そのために現在工夫していることや将来工夫したいことについてたずねた。全体の67.2%が現在、何らかのかたちで他人に見せる工夫をしており、その内容については図-4に示したとおりである。また、図-5は、将来の住宅と道路の境界部分の公開許容性や、庭の手入れとの関連を見たものである。

図-5 将来したい庭をみせるための工夫

まず、現在は「塀越しに見える緑を工夫している：53.2%」人が半数以上を占めており、次に「2階以上のベランダに花などの鉢植えを飾る：25.5%」といった工夫が多い。このことより、主に植物を利用した工夫を行っていることが分かる。また、将来は「塀を低くしたり、透けて中の緑が見えるようにする：40.0%」や「塀の外側に鉢を置いたり、緑を植える：27.5%」といった工夫の希望が見られ、現在行っている工夫に多い植物利用から、塀を低くしたり、透けて見えるデザインや敷地の外側に緑を植えるなど、より積極的に庭を見せる工夫をした境界のデザインを希望していることが分かる。

また庭の手入れをする回数が多いほど、外に対して開放的な工夫をしていることが分かり、庭を重要視しきれいに手入れをする人が積極的に境界を工夫し、外側に対し緑を見せたが希望が高いことが分かる。このことから、現在の自分の家の中での工夫を通して他人に緑を見せる意識が高まり、塀を低くしたり、外に鉢や緑を植えるなど、境界空間を開放的に変わせる工夫へと展開していく、というシナリオがみえてくる。

(3) 客との対話の場から見た屋外空間の公開許容性

図-6は接客場所と庭の公開許容性との関連性をみたものである。庭を他人に見せてもいいと答えた人と見せたくないと思えた人、各々に対して、親しい近所の人と全く知らない人、それぞれの場合に対応する場所についての答えをクロスしたものである。その結果、庭を他人に見せてもいいと思っている人の場合が見せたくない人の場合より、部屋(個室)や台所などの私的空間としての領域性が強い空間まで客を入れ対話が行われていることが明らかになった。これに対し、庭を見せたくない人の場合は親しい近所の人の場合は居間まで、全く知らない人の場合は「大門の前」が主な対話の場であり、私的空間としての領域性が強い所までは客を入れないことが分かり、屋外空間の公開許容性は住宅の屋外空間に存在する私的空間の領域性と関連があることが明らかになった。

5. 屋外空間の呼称および利用傾向から見た庭とマダンの概念について

これまで見てきたように、洋式の戸建て住宅においては、屋外

図-6 接客場所と庭の公開許容性

空間が庭的な植栽空間として作られ、それにつれて公開許容性が高まりつつあることが明らかになった。韓国では、住宅の屋外空間は伝統的にマダンと呼ばれ、独特の利用形態があったが、以下の考察では、庭とマダンの概念がどのように認識されているかについて考察する。

(1) 住宅における屋外空間の実態、呼称および認識

(i) <マダン>と<庭>の存在に関する現状認識とその区分

一般の人々の間では、<マダン>と<庭>の区分は必ずしも厳密ではないと考えられるが、住宅の屋外空間を居住者自身が<庭>もしくは<マダン>と意識してどれくらい使っているのだろうか、という点を明らかにすることを目的として、アンケートでは、まず、自宅における<マダン>と<庭>の有無をたずねた。図-7はその結果であり、86.8%の人が「マダンと庭、両方ともある」と回答している。

次に、屋外空間を<マダン>と<庭>とに区別して呼んでいるかどうかについて、たずねた。図-8は、その結果である。屋外空間の呼び方についてであるが、「庭」と意識して呼んでいる人が45.8%、「庭とマダンを分けず」が28.8%、「マダン」と意識し呼んでいる人が25.4%であった。

(ii) <マダン>と<庭>の特性に関する認識

居住者が<マダン>をどのような空間として、また<庭>をど

図-7 マダンと庭の有無

図-8 屋外空間の区分

図-9 <マダン>と<庭>の捉え方

のような空間と捉えているかについて、全体的な傾向の把握を行った。図-9はその結果である。

<マダン>については、「庭を含めた全体空間」(35.0%)、「日頃作業や通路のため空けている場所」(31.7%)と、<庭>につい

図-10 <マダン><庭>だけであると答えた人の<マダン><庭>の捉え方比較

ては「芝生や植物、庭園石や池などで多様に作り込んだ空間」(55.0%)と捉えている傾向が強いことがわかる。

以上の内容を、マダンだけある人と庭だけある人で認識の違いがあるかどうかについてクロスしたものが図-10である。

「マダンだけある」と答えた人の場合は、50.0%が「少々木や花などが植えられている空間」をマダンとして捉えており、庭空間については「芝生や植物、庭園石や池などで多様に作り込

だ空間」と「鑑賞するため木や花などで作り込んだ空間」と捉えている人が、それぞれ33.3%となっている。

「庭だけある」と答えた人の場合、「庭を含めた全体空間」(42.9%)をマダン空間としてとらえており、「芝生や植物、庭園石や池などで多様に作り込んだ空間」(57.1%)を庭空間として捉えている人が多いことが分かった。

すなわち、<庭>の捉え方は、<マダン>と<庭>を「使い分けている人」からみても大きな違いはなく、主に鑑賞するために人工的に作り込まれた空間として認識される傾向がある。これに対し、<マダン>は、「マダンだけある」は全体平均の傾向と同様で、植物が植えられている空間であると捉える傾向が強いが、「庭だけある」と答えた人は、<マダン>を庭を含めた全体の空間であると捉える傾向が見られる。

以上の結果を整理すると、現在使われている「マダン」という用語は、伝統住宅における<マダン>を念頭において使われているとは考えにくく、住宅の近代化の過程において、他国から導入され定着した<庭>という概念に対応する、韓国的な用語の用い方であると考えられる。つまり、屋外空間に対する韓国人の習慣的な表現が、継続的に使用されているのではないかということである。また、従来マダンと呼ばれていた屋外空間が「作業空間」から「植栽空間」へと徐々に変化している様子もうかがえる。

(iii) <マダン>と<庭>に対する希望や意識

図-11 <マダン><庭>の必要性

図-12 屋外空間に設置したいもの

将来、マダンと庭の利用はどのようになり、またどのようにデザインされていくのかについてたずねた。図-11は居住者に<マダン>と<庭>の必要性について、図-12は将来の屋外空間のデザインについて、それぞれの回答結果をまとめたものである。

まず屋外空間における<マダン>と<庭>の必要性は「マダンと庭、両方とも必要：91.7%」が全体の9割以上を占めており、将来の屋外空間に作りたい(植えたい)ことに関する希望については、「花・木・芝生・鉢植え」が一番多く、また「庭園石・池・石灯籠」などが希望されており、将来の屋外空間のデザインは、主に植栽空間や人工的に様々なものが作り込まれ、主に鑑賞するための空間としてデザインされていく可能性があると思われる。また、このようなデザイン希望は先に示したような、<庭>空間の捉え方と同じ内容であることが分かる。

(2) 庭とマダンの概念認識と屋外空間の利用傾向との関連について

図-13 屋外空間の利用状況

(i) 住宅の屋外空間の利用実態

住宅の屋外空間の利用実態をたずねた結果が図-13に示されている。屋外空間の利用に関する内容として取り上げた17項目は＜植栽を利用した鑑賞や趣味空間＞、＜保管・設置の空間＞、＜作業や多用途的に使用する、利用空間＞に区分されるものであり、この選択肢の中から回答者に多重回答してもらった。

全体の傾向としては、「花や木を植え鑑賞：93.3%」や「鉢植えを置いている：86.7%」、「作庭を楽しむ：80.0%」の順で多く、「家族集まりや家内行事：10.0%」、「多様な家事作業場：13.3%」、「運動や遊び場：6.7%」の利用率は低い。すなわち、現状の屋外空間は、従来マダンが「作業空間」などに使われていたのに対し、主に「鑑賞・趣味」の空間として使われていることが分かる。

(ii) 庭・マダンの認識の違いによる屋外空間の利用傾向(図-14)

次に屋外空間における庭・マダンに対する認識の違い別に使い方をみると、「マダンと庭を分けて呼び、マダン・庭の両方ともある：44.8%」人の場合では、全体とほぼ同じ傾向が見られる。しかし「庭と呼び、マダン・庭の両方ともある：20.7%」と「マダンと呼び、マダン・庭の両方ともある：19.0%」と答えた人の場合で異なった傾向がみられた。

たとえば、屋外空間を「庭と呼び、マダン・庭の両方ともある」人の場合、全体の傾向と比べ「家族の集まりや家内行事：33.0%」、「多様な家事作業場：25.0%」などの利用率は高いが、「部屋部屋にいく通路：16.7%」としての利用率は低い。これに対し、屋外空間を「マダンと呼び、マダン・庭の両方ともある」人の場合は「部屋部屋に行く通路：63.6%」の利用率は高く、「家族の集まりや家内行事：0.0%」などの利用率は低い。

また、年齢や性別といった居住者属性との関わりを見るためには今回の調査サンプル数は少ないため、今後サンプル数を増やした上で居住者属性との関連性を調査したい。

6. おわりに

(1) まとめ

以上の結果をまとめると、次のようなことが言える。

図-14 空間認識の違いと屋外空間の利用傾向

①屋外空間の公開許容性については、自分の庭を他人にみせてもいいと思っている人の方が高い。また庭を見せたくない理由としては、防犯・安全上の問題やプライベートな空間だからという理由よりも、手入れをしていないからという管理の問題が原因である場合が多いことが明らかになった。

②また庭を重要視しきれいに手入れをすることは、今後の住宅敷地の境界のあり方にも関わりがあり、庭の手入れ回数が多い人ほど、敷地の外側である敷地の空間に植物を置いたり、塀のテクスチャーや高さを外に対し開放的に変更するなど、将来の境界および外構空間の空間デザインを積極的に見せる意志をもっていることが分かった。

③庭を他人に見せてもいい人と見せたくない人別に、客との対話場所から領域性をみた結果、見せてもいい人の方が個人の私的空間としての領域性が強い所まで客に公開することが分かった。このことより庭の公開許容性と住宅の屋外空間の領域性に関係が

あると考察できる。

④韓国における現代洋式戸建住宅の屋外空間では＜マダン＞と＜庭＞、両方の空間とも混在しているが、日常生活では普段＜庭＞と認識されていることがやや多く、＜マダン＞の認識も若干見えるものの、そこには明確な空間区分は見られない。

⑤＜マダン＞と＜庭＞の認識傾向については、日常生活に利用するため空けている場所という伝統的な＜マダン＞の概念も見られるものの、植栽のためや多目的利用の空間として＜マダン＞が捉えられる傾向が強くなっていることが明らかとなった。

一方、＜庭＞は、主に鑑賞するための空間として、人工的な手法で多様に作り込んだ空間という捉え方が強い。

⑥現状の屋外空間の使われ方は、日常生活のための作業など多用途的に使う空間より、主に植栽を利用した鑑賞や趣味空間として使われている傾向にあった。さらに屋外空間に対する空間認識の違いにより、屋外空間の実際の使われ方が違う傾向にあることが明らかになった。

⑦将来の屋外空間における＜マダン＞と＜庭＞は、マダン・庭の両方とも必要とされており、そのデザインの希望手法は、木や花、芝生などの植栽を主に使い、庭園石や池、石灯籠などで多様に作り込まれた鑑賞する空間としてデザインする希望が多いことが分かった。

(2) 展望

住宅の屋外空間の使い方にはおおまかに作業空間と鑑賞空間が

あるが、今までの＜マダン＞は主に作業空間として位置づけられてきた。しかし、最近は鑑賞空間や趣味の空間としての庭が現われ、＜マダン＞は庭に含まれる、あるいは庭を含めた屋外空間を表現する現代用語になったと考えられる。つまり、マダンという用語の位置づけが変化しているといえる。

こうしたなか、これからはますます鑑賞や趣味空間としての庭の重要性が増加するものと考えられる。マダンにくらべ庭は他人に見せることを前提にしていることが多く、それは領域性にも影響を与える。庭をきれいに手入れするなど重要視している人は、見せたり人を招いたりする空間として、庭や境界のデザインをこだわっている。

従来、韓国の住宅外構空間は機能重視型であり、そのため、通り景観などの公共空間への配慮は少なかった。しかし、これから庭の様に見せる空間が増加することにより公共空間への配慮も増加し、それが景観の質の向上にも貢献するものと思われる。

(3) 今後の課題

今回の分析・考察は、居住者に対するアンケート調査にもとづいて居住者の意識に重点をおいておこなってきた。今後、これに観察を通じて行われた実態調査の結果を加えることにより、内容を深化させるとともに、さらに近代化・洋式化した住宅として韓国の集合住宅団地の屋外空間に関する研究をも調査対象にくわえ、韓式住宅、洋式戸建住宅、集合住宅の屋外空間との比較考察を行っていきたい。

註および引用文献

1) 韓式住宅に近代の要素を取り込んで増改築した住宅を言う。	2) 藤井英二郎(1990):日本と韓国における庭園を中心とした緑地の比較文化	3) ジョン イウォン(1995):韓国済州島の民家における庭園の原型に関する研究:高麗大学校修士学位論文	4) 姜 榮祚・藤井英二郎(1992):韓国釜山市の土地区画整理地区における住宅の庭の構成と植栽について:造園雑誌 55(5), 313-318	5) 韓国大邱市庁(1997):統計年報

Summary : This paper analyzed the actual condition of the usage of outdoor space in the Western-style detached house of the urban area in Korea and the resident's intention for its future design and maintenance through questionnaire survey. In Korea, there has been the word of MADANG to point the outdoor space in the residence site, on the other hand the word of GARDEN is becoming to be used. We analyzed the using tendency of these two words and the actual condition and transformation of outdoor space in new Western-style detached house.

As a result, it becomes clear that outdoor space where has been used for working place in daily life as MADANG formerly has a strong tendency to be used for planting space recently. Moreover, outdoor space is being changed not only to the space for resident's appreciation and interest but also to the space to be shown to other people.